

聖会2 若い金持ち（マタイの福音書 19 章 16-26 節）

第一部

この若者はなぜイエスのところへ来たのだろうか。何か必要を感じたからか。イエスの善良さ、イエスの愛に引かれたのだろうか。恵みが彼をイエスに導いた。恵みが私たちにあふれている。パウロはテモテに書き送った(2 テモテ 1:9)「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものである。」

神はこの若者を知っておられ、彼に知識を授けられた。神ははじめから彼を知っておられた。特に神はこの若者に、聖書の言葉を通してご自身を知らされた。神はこの若者に何が正しく何が間違っているかを教えられた。神は律法を通して、ご自身の御旨やご性質を表された。彼は神が正義を要求する正しい方、慈悲を要求する慈悲深い方、きよさを求めるきよい方であることを知っていた。律法自体が聖なるもの、慈悲深いもの、正しいものである。律法はこの若者が良心を持つようにした。それだけでなく律法は、表面的に、社会の秩序を維持した。神がこの若者住ませた社会自体が、神の恵みをのしるしであり、自分の存在を表す手段であった。神はこの若者が子供のころから彼の信仰を成長させるようなあらゆる活動に参加してきたことを見ておられた。恵みによって、彼は、個人として、彼が生きる共同体の基準に従って生きる道を選んだ。神はこの若者に特別な方法で手をさしのべた。神は彼が裕福な者となり、よい教育を受けることをお許しになった。彼はまだ若すぎて自分の力で財産を築くことはできなかった。彼は親や祖父母から財産を受け継いでいた。自分の働きによって金持ちになったのではない。これこそ恵みのしるしである。この若者には奉仕をするための特別の賜物が与えられていた。神はこの若者に大きな希望を持っておられた。この若者に対する神の希望は、彼自身の野心よりも大きなものであった。彼は良い人間になりたかった。神は彼に完全な人になるように召された。神はいつもこの若者と共におられた。

神は、この若者の敬虔な家族、彼の宗教、彼の宗教仲間をとおして彼とともにおられた。彼は、すぐれた信仰者たちに囲まれていた。神は聖書の中におられた。神は彼からご自身を隠すことはされなかった。特に、聖書を与えられた人々には隠されなかった。神は、この若者が救われるために必要なすべてのことを表された。彼は非常に恵まれた人であった。神は、この若者が若いころから律法を守ることができる力を与えておられた。われわれは皆、罪びとであり、律法の要求を満たすことができない。もしわれわれが律法にかなった生活ができるとすれば、それはただ神の恵みによるものだ。もし、この若い金持ちが律法を守ることができたとすれば、それは神様が恵みによって彼にそれができる力を与えておられたからだ。彼自身の力によるのではない。私は時々思う、神に創られた私という人間が、人の目には、実際以上にきよい人間のように見えているのではないか。実際の私は、怒りっぽい人間だ。

例え:

神はこの若者を創造された。もし彼が確かに律法に従うことができたとすれば、それは神が彼に力を与えられたからである。神は彼に善良さを探求する心を与えられた。彼に永遠のいのちを捜し求めるようにさせたのは神の恵みであった。その恵みが彼をイエスへと導いた。彼はイエスの何を見て、イエスを「先生」と呼んだのだろうか。この若者は、恵みによって、彼がこれまで受けてきた宗教教育や、彼の家

柄、道徳的に正しく生きてきたことなどにも関わらず、自分には何かがかけていることに気づいていた。それは永遠のいのちの確信であった。彼が自分の必要の大きさや必要の内容を彼に示したのも神の恵みであった。生まれつき罪びとである私たちだが、私たちは、永遠のいのちに入るために必要な良いものを求める心を持っていたのだろうか。恵みは彼を導き、彼を主イエスのもとへと連れて行った。イエスの中にある何かは彼をひきつけた。御子をこの世に遣わした父なる神の働きかけなしに、誰も御子キリストのもとに引き寄せられることはないだろう。主イエスこの世から引き上げられるとき、彼はすべての人をご自分のもとへ引き寄せてくださる。そのようにして、この若者はキリストのところへ引き寄せられた。若者はイエスの中によいものを見ていたので、良いことに関する質問をした。彼は永遠の命を捜し求めていた。私たちに永遠の命を求める心を与えるのが、自分が死ぬべき者であることを知っていることであったとすると、それもまた恵みである。永遠のいのちという考え自体も神から与えられたものであり、この若者のように、私たちにそのいのちを求める餓え渴きをあたえる。この恵みは、また、彼が永遠のいのちを持っていないことを教えていた。彼はすべての律法を守っていた。しかし、永遠のいのちの確信がなかった。

恵みは彼の心に恐れることを教えた。そして恵みはまだ、彼の心をその恐れから解き放っていなかった。彼を見るほかの人は、彼が立派で道徳的で金持ちで、すべてのものを自分の見方にする成功者だと思っていた。彼の外見は彼の内側の真実を隠していた。しかし、恵みによって、彼は自分を正直に見つめていた。自分の惨めさを見ていた。そして恵みが彼をイエスのところに導いた。彼はそこで癒されることも可能だった。恵みが彼をイエスのところまで導いた。母の胎内にいたときから、敬虔な家庭に生まれ、信仰深い人々に囲まれて育った彼が、今、主イエスの前に立っていた。彼は人生の大きな岐路に立っていた。彼は、主イエスに「永遠のいのちを得るにはどんな良いことをすればよいのか」と尋ねるのであった。

第二部

「良いこと」と「永遠のいのち」の関係は何か。若者は当然の関係があると考えた。よいことをすれば、その報いとして永遠のいのちが与えられる。

彼は尊敬の心でイエスのもとに来た。イエスを「先生」と呼んだ。彼はユダヤ教の教師ラビのような教えを受けることを期待した。トーラの教え、善についての教え、トーラの解釈、具体的な生き方の教えを期待した。トーラは単なる規則ではなく、具体的な生き方を教えた。トーラは神との関係における基準を提供したものである。聖なるものである。トーラはモーセ五書に関する書物で、律法の解釈に関する 613 の教えが書かれている。レビ人や祭司はトーラを教える責任を負っていた。おそらくこの若者は彼らにも同じ質問をしたであろう。彼にとって、良いことをするとはトーラの教えに従って生きることであった。良いことはすなわちトーラであった。

イエスの答え。なぜあなたは私のところに来たのか。あなたは私の中にどんな良いことを見たのか。私がパリサイ人やレビ人以上にトーラの教えに従って生きているように見えたのか。より多くのトーラの教えに従って生きることがいのちに至る道なのか。私は、安息日に穀物の穂を積んで食べることを許してパリサイ人の怒りを買った。私は、羊よりも人間がもっと大切だと主張した。それでは、良いこととは何か。

イエスは彼に言った。「良いお方は一人しかおられない。唯一の神である。あなたのうちにも、私のうちにも良いものはない。生まれつき良いものはない。神だけが良いお方だ。もし私たちが自分を良い人だと考えるなら、自分を欺いているのだ。すべての良いものは神から出る。もしあなたが自分を良いとみなすなら、自分を欺いている。詩篇の言葉を聴け。詩篇 136 篇「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」神の善は神の愛に結びついている。ここでイエスは言われる。「もし永遠のいのちに入りたなら、命令に従いなさい。」律法と福音は矛盾しない。イエスは律法に従うことを要求される。事実、山上の説教の中で、主は言われた。あなたの義がパリサイ人や律法学者の義に勝らないなら、あなたは神の国に入ることはできない。」(5:20)そしてその後すぐに、イエスは言われた。「もしあなたが怒るなら、殺人を犯したのと同じだ。もし兄弟にうらみを抱いているなら、あなたの捧げものは無意味だ。もし情欲をいだいて見るなら姦淫を犯したのと同じだ。」これらの教えは、律法に追加された教えではない。善、義の内面的性質について語られたものだ。若い金持ちとの会話の後に(23:29-30)、イエスは嘆かれる。「わざわざ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。墓は、その外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れたものでいっぱい。そのように、お前たちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱい。」

イエスはこの若い金持ちにも同じことを感じておられたらどうか。彼は外側は完璧に見えた。牧師が喜ぶような完璧な教会員のようだ。彼の社会、彼の宗教界の伝統的な基準によれば、彼は完璧な人であった。しかし、彼の内側に、イエスは何を見たらどうか。おそらくプライド。誰もがプライドを持っている。プライドは罪の性質の根底にあるものだ。おそらく、他の人と同様に、彼の心の中にもいろいろなプライドがあった。

ある人は権力へのプライドを持ち、高い地位を求め人を支配し、権威を持つことを望む。もしこの若い金持ちが役人であったとすれば(他の福音書にはそう書いてある)、彼は、そこに問題を持っていたら。他の人は知的なプライドを持っている。霊的なプライドを持っている人もいる。「私がすることはすべて正しいものでなければならない。私が聖なる者であるから。」このような態度の人は霊的プライドを持っている。また、彼には道徳的プライドがあったかもしれない。ラインホルト・ニーバーは、このプライドはすべての得を罪の道具にしてしまうと。「私の」正さ、私にとって正しいもの、これは他のすべての人にも絶対的なものとみなす。ニーバーは言う。イエスがいくつかの命令について述べられた後に、最後にあなたの隣人を自分自身のように愛しなさいと締めくくられた。若者「わたしはこれらすべての命令を守ってきました。」彼は「すべて」と強調した。

過去に、オリゲネスがこのことを質問した。「道徳的プライドを持つ人以外に、だれが『私は最後の戒め、『隣人を自分自身のように愛せよ』という戒めを守った』ということができるだろうか。19 節の「愛せよ」はアガペーが用いられている。無私愛。だとすれば、オリゲネスが質問したように、では、あなたはなぜ今も金持ちなのか。あなたの兄弟たちがあのように貧しいのに。このことも、この若者が自分自身を欺いていたもう一つのしるしである。

確信。もし、かれが自分の正しさについてこれほど確信があるなら、なぜ永遠のいのちについて確信がないのか。神の恵みは、彼にこの点について満足できない心を与えた。イエスはこの若者の態度の中

に、入り混じった、葛藤する心、同時に自分を正当化しようとする心を見ておられた。一方、イエスはこの若者が永遠のいのちを持たず、それを捜し求めていることを知っておられた。また、彼は道徳的・宗教的プライドを持っていたので、イエスはそのプライドをまず砕かなければならなかった。

イエスの答えは自己正当化の可能性を打ち砕いた。「もしあなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」彼は若者に、財産や社会の基準によって生きるのではなく、信仰によって生きることを求められた。「すべてを与えなさい。あなたがあなた自身、自分の財産、家族などでなく、わたしだけに頼って生きるために。あなたは将来のことが分からないだろう。しかし、将来を支配しているのが誰であるかを知るようになる。財産は持てないだろう。人々からの賞賛も受けないだろう。しかし来なさい。見えるものによって生きるのではなく、信仰によって生きなさい。」

イエスが若者い命じられたことは「貧しい人に与えなさい」これは永遠の命をえるための最後の一つの大きな行為をせよという意味ではなく、自分を捨てなさいという命令である。

この若者と同時代のもう一人の若者がいた。彼ほど裕福ではなかったが、彼以上に知識にすぐれ、彼と同じように道徳的プライドを持っていた。彼はラビの教えの中でイエスと出会ったのではなく、ダマスコへの途上で出会った。彼も、この若者と同様に、自分の肉の力に自信を持っていた。八日目に割礼を受け、ヘブル人の中のヘブル人であった。彼、サウロは、この若者以上に律法を守ってきた。パリサイ人であった。律法の義に関する限り、サウルもこの若者も完璧であった。若者と同様にサウルも人生の岐路に立っていたが、サウルはイエスについて行くために、すべてを捨てる決断をした。彼はキリストを得るためにすべてを失った。彼は神から与えられる義、信仰による義を求めた。彼はローマ教会に宛てて書いた。「律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからだ。律法によっては、かえって罪の意識が生じる。」(3:20)彼はガラテヤ教会に書いた。「律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためである。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者はひとりもないからだ。」(2:16)そしてエペソ教会にも書いた。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われた。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物だ。」(2:8)

第三部

イエスが若者に教えようとしておられるのは、彼の信仰のさらなるステップであり、その入り口となるのは、従順であり訓練であった。

完全であるとはどういう意味か。このことについてイエスの答えが助けになる。山上の説教、マタイ5章に戻ろう。43-48節。天の父が完全なように、完全でありなさい。わたしたちはどのようにして神と同じように完全になれるのか。

イエスの意味は何か:もし神と同じように全能であれといえ、まったく無意味だ。そのようなことは達成できないだけでなく、そうしようとするならば、自分を専制君主にしてしまう。それでは、われわれは神のようにすべてのことを知る者であれということなのか。たとえ、90歳まで最高の大学で勉強を続けたとしても人が知ることをすることはわずかである。それでは、創造主として完全であれということか、これ

もばかっている。

神々の上に立つ無感覚で疎遠で感情をもたない絶対的の神を作り出したのはギリシャ人の思想である。彼らは、神をこのような絶対的存在として考えていたのだが、残念なことに、その概念がキリスト教の神学や西洋の思想にも入り込んでいる。

イエスは、そのようなギリシャ的意味での神の完全を語ったのではなく、ヘブル的カテゴリーの完全について語られたのだ。第一に山上の説教の中での「完全」は、第一に、熟達していること、完全に成熟していることを意味する言葉である。つまり、ここでの質問は、「もしあなたが成熟したいと思うなら」ということである。

神の完全は、5章48節を見ると、神の愛と関連している。神が愛するように愛しなさい。隣人だけでなく敵をも愛しなさい。神は悪い人にも正しい人にも太陽を上らせ、雨を降らせてくださる。神にえこひいきはない。我々は自分を愛する者や、見返りが期待できる人だけを愛する。自分の兄弟にだけ挨拶をしようとするがそこには恵みはない。異邦人でさえ同じことをする。では、われわれを異邦人か区別するものは何か。兄弟でない人に挨拶をし、敵を愛し、迫害する者のために祈ること、これらすべてが愛である。

わたしはある時、ジャガイモ畑に連れて行ってもらった。雹が降った後でジャガイモが被害を受けた。じゃがいもには早く成長するものとゆっくり成長するものがある。早く成長する種類は雹の被害を受けたが、ゆっくり成長する種類は雹が降っても被害を受けなかった。雹が降って、その種類のジャガイモの茎が二つに裂かれていた。しかし、その二つの茎から新しい芽が出ていた。ジャガイモは、雹が振ったことによって、より強くなっていたのである。

神は私たちが人生の嵐を通らせることがある。しかし、その嵐の中で私たちが強くする。完全であることの意味は、自分と異なる回りの人々に対する愛において成熟し続けることを意味する。人が何を言おうと何をしようと、また何が起きようと、愛を貫くことができること。これが天の父が完全であるように完全であれという意味である。

愛することは、私たちが神によって創られたことの意味を成就することである。罪は愛を締め出す。恵みなしに、我々は神が愛するように愛することができない。

水牛の例え。ある農夫は完全な水牛を持っていると自慢するでしょう。どういう意味か。その水牛が、水牛に与えられている使命、つまり畑を耕すという使命を毎日忠実に果たしているという意味である。同じ農夫が完全な鶏を持っていると自慢するでしょう。その意味は何か。その鶏がコンスタントに卵を産み続けるということである。その卵の味は他の鶏の卵と同じであろう。しかし、その鶏は神から与えられた使命を果たしている。農夫は、鶏に鋤をつけることができないと不平を言うことはない。鶏が田植えをしないからと言って怒らない。なぜなら、それは鶏の本質とは無関係のことだから。同じように彼は水牛が卵を産まないからと不平は言わない。農夫には妻がいる。妻が卵を産まないからと彼は怒らない。彼が妻に期待しているものは愛である。水牛にとって耕すこと、鶏にとって卵を産むことと同じように、

妻は愛することによって自分に与えられた使命を果たすのである。

したがって、完全であるとは、わたしたちが神によって創造されたときに、神が願っているような人として生きることを意味する。私たちには神を愛し隣人を自分のように愛することができる力を備えて創られているのだ。

イエスが若い金持ちに語った律法の戒めはすべて愛と関連している。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証してはならない。父と母を敬え。これすべてを一言で言えば、隣人を自分自身のように愛せよということである。

完全の本質は、人間の本質と同じで愛である。私たちは愛するために創られた。罪はこの愛を滅ぼす。

この若い金持ちに対するチャレンジはまさにこの点においてである。もし満たされたいなら、自分の運命を満たしたいなら、もし神が創造された本来の目的にかなった人になりたいなら、持ち物を売り払って貧しい人に与えなさい。そしてわたしについて来なさい。

イエスが求めておられるのはアガペーの愛、自分を犠牲にする愛である。イエスは、この若者に本当の充実感、喜びを与えるのが何であるかを知っておられたが、この若者は他者よりも自分自身を大切に考え、立ち去った。喜びでなく悲しみと共に。

ホーリネス、完全、これは幸福の道である。しかし私たちは、この若者のように、それを物質的な物の中に見出そうとする。それらは充実感や幸福感を与えるように思えるが、実際には悲しみをもたらす。

もし私たちが富んでいるなら注意しなければならない。富んでいることが神の国に入れることの印ではないからだ。イエスは弟子たちに警告された。「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」弟子たちはびっくりした。彼らは、豊かであることは神の祝福のしるしだと考えていたので。しかし、実際は反対である。貧しい者、心の貧しい者が幸いである。神の国はその人のものだからである。

キリストに従うとは、いろいろなものを捨てることである。弟子たちも主イエスに少し誇らしげに言った。「わたしは何もかも捨ててしたがって来ました。」イエスは言われる。私たちは主イエスのためにすべてのものを捨てることである。しかし私たちは永遠のいのちを受け継ぐ。世の人々の目には我々は敗者に見える。しかし、神はすべてのものを逆転してくださる。すべてのものを捨てたものが勝利者となる。私たちは、一つの生き方をするようにとチャレンジを受けている。主の主権について抽象的な決断、霊的な決断をするだけでなく、弟子としてキリストのために生きるようにと召されている。

第四部

イエスはわたしを受け入れなさいとは言われぬ。わたしについて来なさいと言われる。

この言葉は、イエスが最初の弟子ペテロとアンデレを召したときに使ったのと同じ言葉である。(マタイ 4:19)。彼は二人にガリラヤ湖で、網を捨てるように言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁

師にしよう。」彼らはすぐに網を捨ててイエスについて行った。彼らはこの金持ちほど捨てるものは多くなかっただろう。しかし彼らにとって彼らの仕事、将来の生活、父親を置いて行くことは同じように難しいことであった。ペテロは主イエスに言った。「私たちは、何もかも捨ててしたがって来ました。」彼は 3 年前にイエスから召されたときのことを思い出したのであろう。

イエスは「わたしを受け入れなさい」とは言われぬ。もちろん、そのことも含まれてはいるが、イエスについて行きたいと思うなら、イエスを受け入れなければならないからだ。しかし、イエスを何として受け入れるのか。イエスの最初の要求は弟子になれということである。絶対的な従順であり、他者への犠牲的な愛である。もし、最初にキリストに対してそのような献身をすることに躊躇するならば、その人は、どのような弟子になるであろうか。この世半分キリスト半分といった生き方をする人になるのだ。

イエスは言われる。「ついて来なさい。」この若者は、自分の罪を告白することができたであろう。ただ、彼は自分には告白するような罪はほとんどないと考えていた。告白のことを口にすることもできたであろう。イエスがここで求めているのは、教義に対して同意すること、心の中で信じることではない。イエスが求めておられるのは新しい生き方である。

この若い金持ちの場合、イエスは貧しい人々との和解を求めておられる。もしこの金持ちがイエスの言葉に従うなら、彼は、生涯を通じて、自分の持っているものを貧しい人々に与えるであろう。イエスが求めておられるのは、犠牲を払うことだけでなく、従順に従うことである。

キリストは私たちの前におられる。「わたしに従ってきなさい。」イエスは言われる。わたしが歩いているところを歩きなさい。(20:22)進むべき道は私たちの前にある。従うとは立ち止まっていることではない。前進することである。どこかへ進んで行くことである。そこに目標がある。イエスが私たちを導くのは十字架であり復活である。

イエスがマタイの福音書の最後のところで私たちに「世に出て行きなさい」と命じられた。それはできるだけ多くの人に決心カードに記入してもらいなさい、講壇のところに出てきて跪かせなさい、手を上げさせなさい、祈らせなさいと命じておられるのではない。私たちは、出て行って弟子を作りなさいと命じられている。そして「わたしがあなたがたに命じたすべてのことを教えるように」と命じられた。私たちhあ決心者を起こしなさいと命じられているのではない。弟子を作るようにと命じられている。それは、恵みの力によって人々がイエスに従って生けるようにしなさいということである。

ボンヘッファーの「キリストに従う」という本の中で、ある牧師と教会員の会話が描かれている。

「わたしは信仰を失いました。」

「み言葉に聞きなさい。」

「聞いてはいるが、何も得るものはない。」

「あなたは本当は聞きたくないのだ。」

「いえ、聞きたいのだ。」

牧師は一つの言葉を思い出す。「信じる者だけが従うのだ。」しかし、この言葉も教会員には助けにならない。この人は信じるのがとても難しいと感じていた。

牧師が教会員に迫る。「あなたは不従順だ。あなたの不従順がキリストの言葉を聞くことを妨げている。

安価な恵みにその人を隠れさせてはならない。

若い金持ちにも神の恵みは十分に注がれていた。彼は弟子となる道を選ぶことができた。しかし、弟子となるためにはイエスの命令に従わなければならない。若者が「永遠の命を得るためには何をしなければならないか」とたずねたとき、それは単に霊的な質問、神学的な質問だけにとどまらない。もし、この若者が続けて質問することが許されたなら、彼は、命令に従うという必要を避けるための質問をしたであろう。

この若者は律法を守る術は知っていたが、主なるキリストに従うすべを知らなかった。それで、彼が真の弟子となるために、彼が逃げるができない状況を作らなければならなかった。なぜですかとたずねる必要はない。ただ従えばよいのである。

イエスが言われたように、金持ちが神の国に入るよりはらくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。しかし、イエスはこうも言われている。「神にとってはできないことはない。」私たちが主に従うことによって、神の国に入ることができるのはただ、希望的観測ではなく、神の恵みによる約束である。神は不可能を可能にすることができる方だ。

この若者を神の国から追い出すのは神の御心ではない。また神がなさることでもない。それは若者が選択したことである。彼はイエスの言葉について思い巡らし、イエスの弟子になるには犠牲が大きすぎると判断した。人が滅びることは神の御心ではない。人々はこの若い金持ちのように、誰もが神の声を聞いている。そして、決断を迫られている。従うために必要な神の恵みが十分に与えられている。それでも、人は、キリストよりもこの世に従う道を選んで滅びに向かっている。

誰もがしなければならない決断がある。キリストに従う生き方を選択することである。キリストの命令は、私たちの生き方としての being と行いとしての doing の両方が含まれる。being としては、前にのべたように、私たちがプライドや自己中心の心を捨てることである。それは救われるために、ただ神のみに頼る生き方である。doing の前に being が必要である。行きなさい。売りなさい。来なさい。従いなさい。この行為のすべては心の姿勢を具体的に表したものである。私たちの信仰は、具体的な行為となって現れないなら、無意味である。

心の中の愛の実が外側に何かの行い、完成したものでなくても成長し続けるものとし行いとなって現れるはずである。我々は自分の愛が不十分なものであることを知っている。どのように、どこで、誰を愛すればよいか分からない。私たちは、自分が育った環境などによって心理的な影響を受けている。もし多くの兄弟とともに育ち、おもちゃなどをいつも共用しなければならない環境で育ったならば、ある意味で愛することは簡単かも知れない。もし甘やかされて、いつも自分だけのものを持って育ったならば、難しいだろう。

ローマ軍の医者であった、ツールのマーチンという人はある冬の日、ある町に入ろうとした時、一人の

乞食に呼び止められた。彼は乞食に与える金を持っていなかった。しかし彼は乞食が震えているのに気づいた。それで彼は自分のぼろの上着を脱いで、それを二つに引き裂いて、片方を乞食に与えた。その夜、マーチンは夢を見た。イエスが、自分が引き裂いて乞食に与えた上着を着ておられた。そして御使いがイエスにたずねた。「主よ。なぜ、あなたはそのコートを着ておられるのですか。」イエスが答えた。「わたしの僕マーチンがこれをわたしにくれたのだ。」